

解説

サンゴ分類の話 連載 第4回 イシサンゴ類の学名の変更 2023

深見裕伸^{1,*}・北野裕子²

¹ 宮崎大学農学部海洋生物環境学科 〒889-2192 宮崎県宮崎市学園木花台西 1-1

² 一般財団法人自然環境研究センター 〒130-8606 東京都墨田区江東橋 3-3-7

要旨 2012~2014年にかけて旧オオトゲサンゴ科と旧キクメイシ科を中心に分類体系が大きく変更され、それ以降も毎年分類の変更に伴う学名の変更が報告されている。最近では Rowlett (2020) によって多数の科や属の分類の変更が報告された。このように、分類体系の変更が激しい現状において、サンゴ研究者は使用する学名を最新の情報を踏まえて把握する必要がある。しかしながら、分類学に深く関わっていない研究者にとってその作業に時間を費やすことが困難である。そこで、今回は、2016年以降の分類改変に伴う学名の変更があった主なイシサンゴ類の種や高次分類群について紹介する。

キーワード 学名, 分類, 種, 属, 科

はじめに

2012年に発表された Budd et al. (2012) による旧オオトゲサンゴ科 (family Mussidae) の大幅な分類体系の改変以降、多くの科や属でサンゴの分類体系の改変が進められている。それに伴い新しい学名の記載や所属する分類群の変更が行われ、さらに和名も変更されている。そのため、サンゴ研究者は使用する学名を最新の情報を踏まえて把握する必要があるのだが、分類学に深くかかわっていない研究者にとってはサンゴの分類体系の改変の速度が速く追いついていないのが現状であろう。このサンゴの分類の話の連載では、分類学的な問題や和名の変更に焦点をあて説明しているが、今回は、2016年以降の最近の学名の変更について紹介する。

近年で最も衝撃的だったのが Rowlett (2020) が自費出版した図鑑でのイシサンゴ類の分類体系の変更である。図鑑となると第三者による査読を経ないため、著者の意見だけが反映される。これらの変更自体は動物命名規約においても有効ではあるものの、査読を経ない出版物において新種記載や分類体

系の変更を行うことについては賛否がある。ただ、イシサンゴ類では、Veron (2000) の *Coral of the world* や Dai and Horng (2009) の *Scleractinia fauna of Taiwan* といった査読のない出版物 (図鑑) においても分類学的改変がなされてきた歴史がある。おそらく、イシサンゴ類の分類学の研究者が少ない弊害かもしれない。その一方で、学術論文として発表された Arrigoni et al. (2014) や Huang et al. (2016) などでは、ミトコンドリアの COI や非翻訳領域、核の rRNA のスペーサー領域である ITS やヒストン H3 領域等の DNA 塩基配列を用いた分子系統学的研究に、骨格形態の微細構造の観察、タイプ標本との比較といった従来からの分類学的手法を用いた分類体系の改変も進められている。

本稿では、おもに2016年以降に学名の変更があった種や高次分類群について紹介する。2015年以前の属や科の主な変更 (例えば旧キクメイシ科 Faviidae のインド・太平洋産の種がサザナミサンゴ科 Merulinidae に移行するとともに、インド・太平洋産のキクメイシ属が *Favia* ではなく *Dipsastraea* に属するようになったなど) は深見 (2016) を参考にさせていただきたい。しかしながら、未だ認知度の低い分類群についていくつか再掲しておく。Dai and Horng (2009) によりオオトゲサンゴ科 Lobophylliidae およびコマルキクメイシ科 Plesias-

*連絡著者

E-mail: hirofukami@cc.miyazaki-u.ac.jp

担当編集者: 中村 崇 (編集長)

treidae が提案され, それぞれオオトゲキクメイシ属 *Acanthastrea* を含む 13 属, およびコマルキクメイシ属 *Plesiastrea* が属している。また Veron (2013) により Oulastreidae が復活し, キクメイシモドキ属 *Oulastrea* の所属がこの科に移動している。

科レベルでの分類の変更

科レベルでの分類の変更については表 1 にまとめた。Rowlett (2020) によりルリサンゴ科 Leptastreidae とミズタマサンゴ科 Plerogyridae が新しく提案された。加えて, オオナガレハナサンゴ属 *Catalaphyllia* がハナサンゴ科 Euphylliidae からサザナミサンゴ科 Merulinidae に移動された。一方で, ヒラフキサンゴ科 Agariciidae に属していたヨロンキクメイシ属 *Coeloseris* が分子系統解析および形態解析からハナサンゴ科に移動され (Arrigoni et al. 2023), さらにリュウモンサンゴ属 *Pachyseris* については, ヒラフキサンゴ科の他属から遺伝的に遠く離れるという結果 (Fukami et al. 2008, Kitahara et al. 2010) をもとに, Terraneo et al. (2014) 以降で科所属未定 family *incertae sedis* として扱われ

ていたが, Quek et al. (2023) により Pachyseridae (和名なし) が新設された。また, 化石サンゴの解析の結果, *Siderastrea* (和名なし) およびニセヤスリサンゴ属 *Pseudosiderastrea* が Rhizangiidae (和名なし) に移動された (Löser et al. 2021)。

属レベルでの分類の変更

2016 年以降に属名が変更された主な種を表 2 にまとめた。以下, 混乱を防ぐために旧学名は [] に入れている。Rowlett (2020) によりオオスリバチサンゴ [*Turbinaria peltata*] がスリバチサンゴ属 *Turbinaria* から *Duncanopsammia* (和名なし) に移動され *Duncanopsammia peltata* となったが, これは Arrigoni et al. (2014) における「スリバチサンゴ属の種の中で, オオスリバチサンゴのみが同属他種から遺伝的に離れており, *Duncanopsammia axifuga* (和名はないが, ペットショップ等ではウイスキーコーラルやダンカンサンゴと呼ばれている) と近縁になった」という分子系統解析の結果を基にしている。しかし, スリバチサンゴ属 *Turbinaria* のタイプ種である *Turbinaria crater* (和名なし)

表 1 2016 年以降の科レベルでの分類の変更

現在の所属の科	所属が変更された属	文献
ルリサンゴ科 Leptastreidae (新設)	ルリサンゴ属 <i>Leptastrea</i>	1
ミズタマサンゴ科 Plerogyridae (新設)	タバサンゴ属 <i>Blastomussa</i>	1
	ハナビラサンゴ属 <i>Nemanzophyllia</i>	1
	オオハナサンゴ属 <i>Physogyra</i>	1
	ミズタマサンゴ属 <i>Plerogyra</i>	1
サザナミサンゴ科 Merulinidae	オオナガレハナサンゴ属 <i>Catalaphyllia</i>	1
ハナサンゴ科 Euphylliidae	ヨロンキクメイシ属 <i>Coeloseris</i>	2
Pachyseridae (和名なし) (新設)	リュウモンサンゴ属 <i>Pachyseris</i>	3
Rhizangiidae (和名なし)	<i>Siderastrea</i> (和名なし)	4
	ニセヤスリサンゴ <i>Pseudosiderastrea</i>	4

1: Rowlett (2020), 2: Arrigoni et al. (2023), 3: Quek et al. (2023), 4: Löser et al. (2021)

表 2 所属する属が変更された主な種

	新学名	旧学名	文献
キサソゴ科 Dendrophylliidae			
オオスリバチサンゴ	<i>Duncanopsammia peltata</i>	[<i>Turbinaria peltata</i>]	1
サザナミサンゴ科 Merulinidae			
ホソエダタバネサンゴ	<i>Astraeosmilia curvata</i>	[<i>Caulastraea curvata</i>]	2
タバネサンゴ	<i>Astraeosmilia tumida</i>	[<i>Caulastraea tumida</i>]	2
ウルトラキクメイシ	<i>Astraeosmilia maxima</i>	[<i>Dipsastraea maxima</i>]	2
アミメサンゴ科 Psammocoridae			
ヤスリサンゴ	<i>Psammocora columna</i>	[<i>Coscinaraea columna</i>]	1
ハナサンゴ科 Euphylliidae			
ナガレハナサンゴ	<i>Fimbriaphyllia ancora</i>	[<i>Euphyllia ancora</i>]	3
和名なし	<i>Fimbriaphyllia baliensis</i>	[<i>Euphyllia baliensis</i>]	1
コエダナガレハナサンゴ	<i>Fimbriaphyllia divisa</i>	[<i>Euphyllia divisa</i>]	3
ツツナガレハナサンゴ	<i>Fimbriaphyllia paraancora</i>	[<i>Euphyllia paraancora</i>]	3
ツツコエダナガレハナサンゴ	<i>Fimbriaphyllia paradivisa</i>	[<i>Euphyllia paradivisa</i>]	3
ハナサンゴモドキ	<i>Fimbriaphyllia paraglabrescens</i>	[<i>Euphyllia paraglabrescens</i>]	1
ハナブサツツマルハナサンゴ	<i>Fimbriaphyllia yaeyamaensis</i>	[<i>Euphyllia yaeyamaensis</i>]	3
オオトゲサンゴ科 Lobophylliidae			
イボハナガタサンゴ	<i>Acanthastrea pachysepta</i>	[<i>Lobophyllia pachysepta</i>]	4
オオトゲキクメイシ	<i>Homophyllia bowerbanki</i>	[<i>Acanthastrea bowerbanki</i> , <i>Acanthastrea hillae</i>]	5
イシガキオオトゲキクメイシ	<i>Lobophyllia ishigakiensis</i>	[<i>Acanthastrea ishigakiensis</i>]	4
ヒラサンゴ	<i>Lobophyllia rowleyensis</i>	[<i>Australomussa rowleyensis</i>]	4
アザミハナガタサンゴ	<i>Lobophyllia vitiensis</i>	[<i>Parascolymia vitiensis</i>]	5
カクオオトゲキクメイシ	<i>Micromussa lordhowensis</i>	[<i>Acanthastrea lordhowensis</i>]	5
和名なし	<i>Micromussa multipunctata</i>	[<i>Favites multipunctata</i>]	5
トゲハナサンゴ	<i>Echinophyllia glabra</i>	[<i>Oxypora glabra</i>]	6
ヒラキッカサンゴ	<i>Oxypora echinata</i>	[<i>Echinophyllia echinata</i>]	6

1: Rowlett (2020), 2: Arrigoni et al. (2021). 3: Luzon et al. (2017), 4: Huang et al. (2016), 5: Arrigoni et al. (2016), 6: Arrigoni et al. (2019)

し) のホロタイプが紛失されているため, Arrigoni et al. (2014) では, 過去の記述やスケッチからおそらく *T. crater* は [*T. peltata*] とは異なる種だろうと推定はしたものの, 曖昧な部分が残っていたた

め [*T. peltata*] を *Duncanopsammia* に移動するという分類の変更までは行わなかった。属を変更しないというこの判断は確実性を重視した結果なのだが, Rowlett (2020) ではその判断を軽視し Arrigoni

et al. (2014) の結果をもとに属の変更を行っている。実際のところ、この変更で大きな問題はないと思われるが、確実ではないと論文で書いていたものを、査読のない図鑑で追加情報無しで変更するというのは今後の分類学的混乱を助長する可能性がある。

さらに Rowlett (2020) では、同様の理由による属の移動が他にも複数の種で行われている。その一例がヤスリサンゴ [*Coscinaraea columna*] のアミメサンゴ属 *Psammocora* への移動である。これは Benzoni et al. (2012a, b) による「ヤスリサンゴがアミメサンゴ属に遺伝的に近縁である」という結果に基づくのだが、この論文ではヤスリサンゴが1群体しか解析されておらず、その結果の普遍性には疑問が残る。このように証拠が不十分にも関わらず属を移動するというのは将来的に混乱を引き起こす原因にもなるだろう。一方、和名に関しては、この変更に伴い、ヤスリサンゴが、ヤスリサンゴ属ではなく、アミメサンゴ属に属するというややこしい状況になっているが、この変更自体に疑問があることと、日本サンゴ礁学会が公開した和名のガイドライン (深見ら 2022) にも示されてあるように、学名の変更に伴う和名の変更はさらなる混乱を引き起こす原因となるため、このまま現在の和名が継続して使用されることとなる。

Rowlett (2020) による変更の他に、属レベルでの分類体系の変更で特筆すべきは、Arrigoni et al. (2021) によるタバネサンゴ属 *Caulastraea* の改変と Luzon et al. (2017) によるナガレハナサンゴ属 *Euphyllia* の改変である (表2)。Arrigoni et al. (2021) は、サザナミサンゴ科 Merulinidae のタバネサンゴ属の種が遺伝的に大きく2グループに分かれることを示した。一つのグループには、タイプ種であるネジレタバネサンゴ *Caulastraea furcata* とトゲタバネサンゴ *C. echinulata* が含まれ、もう一つのグループにはホソエダタバネサンゴ [*Caulastraea curvata*] とタバネサンゴ [*Caulastraea tumida*]、さらにキクメイシ属 *Diploastraea* に属しているウルトラキクメイシ [*Diploastraea maxima*] が含まれた。この結果を基に、ホソエダタバネサンゴ、タバネサンゴ、ウルトラキクメイシが *Astraeosmia* (属の和名なし) に移動された。和名としては、タバネサンゴが、タバネサンゴ属ではなく *Astraeosmia* に属するという結果になっている。ただし、Arrigoni et al. (2021) で解析に用いられたニュー

カレドニア産と日本産のタバネサンゴがかなり形態的に異なっており、日本産のタバネサンゴと認識されている種 (日本温帯域で主にみられる) が *A. tumida* ではなく未記載種の可能性もある。そのため、今後日本産のタバネサンゴについては分類学的な検証が必要である。

Luzon et al. (2017) では、ハナサンゴ科 Euphyllidae のナガレハナサンゴ属 *Euphyllia* の種が遺伝的に2グループに分かれ、タイプ種であるハナサンゴ *Euphyllia glabrescens* 以外の種 (表2) が全て別グループとなった。そのため、別グループの種の属名が *Fimbriaphyllia* に変更された。これに伴い、*Fimbriaphyllia* のタイプ種となったナガレハナサンゴ *Fimbriaphyllia ancora* が属する *Fimbriaphyllia* がナガレハナサンゴ属の和名を引き継ぎ、ハナサンゴ *Euphyllia glabrescens* が属する *Euphyllia* にはハナサンゴ属という新しい属の和名が与えられることとなった (西平 2020)。また、カンムリハナサンゴ *Euphyllia cristata* はハナサンゴ *E. glabrescens* と同じ遺伝的なグループに属するという Akmal et al. (2017) の解析結果を引用し、ハナサンゴ属のままとなっている。一方、*E. baliensis* (和名なし) とハナサンゴモドキ *E. paraglabrescens* については分子系統結果はないものの Rowlett (2020) により *Fimbriaphyllia* に移行された。

さらにオオトゲサンゴ科 Lobophyllidae では、Huang et al. (2016) および Arrigoni et al. (2016, 2019) による分子系統解析および形態解析により、いくつかの種の属名が変更されている。例えば、イボハナガタサンゴ [*Lobophyllia pachysepta*] がオオトゲキクメイシ属 *Acanthastrea* に移動された一方で、イシガキオオトゲキクメイシ [*Acanthastrea ishigakiensis*] がハナガタサンゴ属 *Lobophyllia* に移動されている (表2)。

種名の復活

単一種だと思われている場合でも、その種を詳しく調べてみると別種が含まれており、過去に記載されたものの現在は使われていない種名 (多くの場合、何かの種のシノニムとされている) が有効であると判明することがある。Mitsuki et al. (2021) は、パリカメノコキクメイシ *Coelastrea aspera* に別種

が含まれていることを発見し、形態および分子系統解析の結果、その種に対して過去の種名を復活させ *Coelastrea incrustans* とし、和名はヒュウガパリカメノコキクメイシと名付けた。日本国内の生息分布については、パリカメノコキクメイシは沖縄県以南に生息しているが、ヒュウガパリカメノコキクメイシは温帯域～沖縄県以南に広く分布している。また、生殖様式については、パリカメノコキクメイシは放卵放精型およびプラヌラ幼生保育型であるが、ヒュウガパリカメノコキクメイシはパンドル放出型である。この両種は骨格形態でも隔壁の数などによって区別可能である。

まとめ

近年のイシサンゴ類の分類体系の変更は、従来の形態をもとにした形態分類と、ミトコンドリアや核遺伝子マーカーを使用した分子系統解析から推定された系統関係のずれを解消するために行われていた。そのずれも大部分は解消され、最近はやや落ち着いたように思われる。しばらくは属や科といった高次分類群の学名は変更されないだろう。一方で種以下のレベルでの解析は未だ不十分である。サンゴにおいて、これまで高次分類群で用いられていた遺伝子マーカーでは近縁種間の違いが明確に検知できなかった。しかしながら、近年、Cowman et al. (2020) による保存エレメント (ultra-conserved element: UCE) を利用したミドリイシ属の種間の系統解析など、ゲノムレベルでの変異情報を活用した解析技術が発達したことにより、近縁種間の違いが検知可能となってきている。今後、種以下のレベルでのサンゴの研究が増加していくことを期待している。

引用文献

Akmal KF, Shahbudin S, Hadry NNF, 'Ulwan KSKA, Amira MZK (2017) Taxonomic status of Euphylliidae corals in Peninsular Malaysia based on morphological structures and phylogenetic analyses using mitochondrial COI gene. *Russian Journal of Marine Biology* 43: 118-126

Arrigoni R, Kitano YF, Stolarski J, Hoeksema BW, Fukami H, Stefani F, Galli P, Montano S, Castoldi E, Benzoni F (2014) A phylogeny reconstruction of the Dendrophylliidae (Cnidaria, Scleractinia) based on molecular and micromorphological criteria, and its ecological implications. *Zoologica Scripta* 43: 661-688

Arrigoni R, Benzoni F, Huang D, Fukami H, Chen CA, Berumen ML, Hoogenboom M, Thomson DP, Hoeksema BW, Budd AF, Zayasu Y, Terraneo TI, Kitano YF, Baird AH. (2016) When forms meet genes: revision of the scleractinian genera *Micromussa* and *Homophyllia* (Lobophylliidae) with a description of two new species and one new genus. *Contributions to Zoology* 85: 387-422

Arrigoni R, Berumen ML, Stolarski J, Terraneo TI, Benzoni F (2019) Uncovering hidden coral diversity: a new cryptic lobophylliid scleractinian from the Indian Ocean. *Cladistics* 35: 301-328

Arrigoni R, Huang D, Berumen ML, Budd AF, Montano S, Richards ZT, Terraneo TI, Benzoni F (2021) Integrative systematics of the scleractinian coral genera *Caulastrea*, *Erythrastrea* and *Oulophyllia*. *Zoologica Scripta* 50: 509-527

Arrigoni R, Stolarski J, Terraneo TI, Hoeksema BW, Berumen ML, Payri C, Montano S, Benzoni F (2023) Phylogenetics and taxonomy of the scleractinian coral family Euphylliidae. *Contributions to Zoology* 92: 130-171

Benzoni F, Arrigoni R, Stefani F, Stolarski J (2012a) Systematics of the coral genus *Craterastrea* (Cnidaria, Anthozoa, Scleractinia) and description of a new family through combined morphological and molecular analyses. *Systematics and Biodiversity* 10:4, 417-433

Benzoni F, Arrigoni R, Stefani F, Reijnen BT, Montano S, Hoeksema BW (2012b) Phylogenetic position and taxonomy of *Cycloseris explanulata* and *C. wellsii* (Scleractinia: Fungüidae): lost mushroom corals find their way home. *Contributions to Zoology* 81: 125-146

Cowman PF, Quattrini AM, Bridge TC, Watkins-Colwell GJ, Fadli N, Grinblat M, Roberts TE, McFadden TS, Miller DJ, Baird AH (2020) An

- enhanced target-enrichment bait set for Hexacorallia provides phylogenomic resolution of the staghorn corals (Acroporidae) and close relatives. *Molecular Phylogenetics and Evolution* 153: 106944
- Dai CF, Horng S (2009) Scleractinia fauna of Taiwan. II. The robust group. National Taiwan University, Taipei, pp. 1-162
- Fukami H, Chen CA, Budd AF, Collins A, Wallace C, Chuang YY, Chen C, Dai CF, Iwao K, Sheppard C, Knowlton N (2008) Mitochondrial and nuclear genes suggest that stony corals are monophyletic but most families of stony corals are not (order Scleractinia, class Anthozoa, phylum Cnidaria). *PLoS ONE* 3: e3222
- 深見裕伸 (2016) 分類と系統：有藻性イシサンゴ類における分類体系変更の現状 2015. *生物科学*, 67: 201-215
- 深見裕伸・野村恵一・梶原健次・横地洋之・野中正法・立川浩之・北野裕子・鈴木 豪・藤田喜久・山野博哉 (2022) 「日本産イシサンゴ目の標準和名の提唱と使用のガイドライン」の策定について. *日本サンゴ礁学会誌* 24: 1-7
- Hoeksema BW, Cairns S (2023) World List of Scleractinia. Scleractinia incertae sedis. Accessed through: World Register of Marine Species at: <https://www.marinespecies.org/aphia.php?p=taxdetails&id=206073> on 2023-05-16
- Huang D, Arrigoni R, Benzoni F, Fukami H, Knowlton N, Smith ND, Stolarski J, Chou LM, Budd AF (2016) Taxonomic classification of the reef coral family Lobophylliidae (Cnidaria: Anthozoa: Scleractinia). *Zoological Journal of the Linnean Society* 178: 436-481
- Kitahara MV, Cairns SD, Stolarski J, Blair D, Miller DJ (2010) A comprehensive phylogenetic analysis of the Scleractinia (Cnidaria, Anthozoa) based on mitochondrial CO1 sequence data. *PLoS ONE* 5: e11490
- Löser H, Angel Fernández-Mendiola P, Pérez-Malo J, Domínguez Pascual S, Cahuzac B (2021) Re-definition of the family Rhizangiidae (Scleractinia; Cretaceous to Recent) and description of a new genus from the Early Cretaceous of Spain. *Neues Jahrbuch für Geologie und Paläontologie - Abhandlungen* 299: 259-274
- Luzon KS, Lin MF, Ablan Lagman MCA, Licuanan WRY, Chen CA (2017) Resurrecting a subgenus to genus: molecular phylogeny of Euphyllia and Fimbriaphyllia (order Scleractinia; family Euphyllidae; clade V). *PeerJ* 5: e4074
- Mitsuki Y, Isomura N, Nozawa Y, Tachikawa H, Huang D, Fukami H (2021) Distinct species hidden in the widely distributed coral *Coelastrea aspera* (Cnidaria, Anthozoa, Scleractinia). *Invertebrate Systematics* 35: 876-891
- 西平守孝 (2020) 有藻性サンゴ類 属の同定 練習帳. 沖縄美ら島財団総合研究センター, 沖縄, pp. 1-140
- Quek ZBR, Jain SS, Richards ZT, Arrigoni R, Benzoni F, Hoeksema BW, Carvajal JI, Wilson NG, Baird AH, Kitahara MV, Seiblitiz IG, Vaga CF, Huang D (2023) A hybrid-capture approach to reconstruct the phylogeny of Scleractinia (Cnidaria: Hexacorallia). *Molecular Phylogenetics and Evolution* 186: 107867
- Rowlett J (2020) Indo-Pacific Corals. Rowlett (self-published). pp. 1-809
- Terraneo TI, Berumen ML, Arrigoni R, Waheed Z, Bouwmeester J, Caragnano A, Stefani F, Benzoni F. (2014). *Pachyseris inattesa* sp. n. (Cnidaria, Anthozoa, Scleractinia): a new reef coral species from the Red Sea and its phylogenetic relationships. *ZooKeys* 433: 1-30
- Veron JEN (2000) Corals of the World Vol. 1-3. Australian Institute of Marine Science, Townsville, pp. 1-1410
- Veron JEN (2013) Overview of the taxonomy of zooxanthellate Scleractinia. *Zoological Journal of the Linnean Society* 169: 485-508

2023年1月25日 受領

2023年5月18日 受理

© 日本サンゴ礁学会

Commentary

Changes of scientific names of the scleractinian corals until 2023

Hironobu FUKAMI^{1,*} and Yuko F. KITANO²

¹Department of Marine Biology and Environmental Sciences, Faculty of Agriculture, University of Miyazaki,
1-1 Gakuenkibanadai-Nishi, Miyazaki 889-2192, Japan

²Japan Wildlife Research Center, 3-3-7 Kotobashi, Sumida-ku, Tokyo 130-8606, Japan

* Corresponding author: H. Fukami

E-mail: hirofukami@cc.miyazaki-u.ac.jp

Communicated by Takashi Nakamura (Editor-in-Chief)

Abstract Taxonomic classification of the scleractinian corals underwent major revisions from 2012 to 2014, focusing on the former families Mussidae and Faviidae. Since then, changes in scientific names due to the taxonomic revisions of many other corals have been also reported every year. Especially, Rowlett (2020) reported taxonomic revisions of many families and genera of corals. Thus, in the current situation where the taxonomic classification is changing rapidly, coral researchers need to update the scientific names they use. However, it is difficult for researchers who are not deeply involved in taxonomy to spend time on this task. Therefore, in this article, we introduce the main scleractinian corals at the species rank and the higher taxonomic groups that have undergone the changes of the scientific names due to taxonomic revisions since 2016.

Keywords: family, genus, scientific name, taxonomy, species, *Acropora*

Received: 25 January 2023/Accepted: 18 May 2023

© Japanese Coral Reef Society